

墜落せしめて、自らは無事其の愛機を完うすること、屢々なるも亦、死を必して生きるもの。古人の所謂活中死あり、死中活有るの語まことに人を欺かない。此の妙理を身を以て體得したものでなければ、未だ共に兵を談ずるに足らぬ。しかしながら、死を必するも、それにかたまり、それにとらはれては、生を必するの類とつひに五十歩百歩。孫子が將の五危に論ずる通り、生を必するものはこれを虜にしうる如く、死を必するものは、これを殺し得るであらう。ここにおいてか知る。人に致されざるは、必生にあらざると共に、必死にも亦あらず。大死一番して死生悠々たるものでなければ出來ない。

勝ち氣カキに活路は開く。されど客氣カクキは血氣ケツキ、血路ケツロに血迷ふ。

血まなこに血路無く、せつかちは勝ちに非ず。

七分三分の叶合

ナポレオンは最後の五分間といった。惨害と疲憊は彼我共に酷烈な惡戦苦闘である。いづれが最後の五分間を堪へしのみ得るか。勝利の榮冠は、其の最後の五分間を持ちこたへた側に歸する、といふのだが、日本戦國の古諺には、七分三分の叶合カキアヒといふ。

凡そ苦戦にあたつては、動もすれば、自分側の惨害のみが、過大に感ぜられ、失望に陥りがちだが、古來戦場の經驗を統計的に綜合觀察して、彼我の苦戦程度、彼我の惨害疲憊率を數字的にあらはすならば、七分三分のかねあひで、五分五分の惨害と感ぜられる場合ならば、彼の惨害は七に對し、我れは三の惨害だといふのである。すなはち開きは四分、四分の勝ちだといふのである。共に

苦戦に對處すべき心得を道破して、味ふべき言葉だが、一はたつた五分間と時間以示して、簡單直截に訴へるに對し、他は彼我を比較對照、比率的數字で示して、成程とうなづかしめねばやまぬところに、一層の妙味をおぼとめるではないか。

なんのその七分三分に叶合ふ苦戦。

思 ふ 壺

作戰、圖にあたるといふ。思ふ壺にはまるのである。前以て、こちらの豫期したる計畫が的中したのである。そこで占めたしめた占めたりといふことになる。まだ實際には占領にまで至らぬ前に、すでにきつと占領できるといふ、占領の必至必然を掴み得たる叫びである。こちらの思ふ壺にはまることのおかつたよろこびである。作戰計畫は斯うでなければならぬ。

思ふ壺にはまるといひ、占めたりといふ、——おもしろい言葉だと思ふ。

だし抜く

日常用ひられる「だしぬけに」(副詞)、「だしぬく」(動詞)の語は抜くの意が強くひびいて、却つてだしの方は單に所謂ダシに使はれてゐる感があるが、筆者按ずるに、此の語元來は兵法的の語で、イダシを本體とするイダシヌクの語ではなかつたか。

イダヌとは、相手をこちらの思ふ壺に引つぱり出すことで、ヌクとは、抜きおほすこと、抜いて取ること、抜いて追越すことなどの意味を含む所のヌクで、すなはち相手を其虛に乗じて、こちらの思ふ壺に引き出して陥落させてしまふ。抜き取つてしまふ。先を越してしまふことであつたらう。

兵法は人を致して人に致されずとは、孫子の有名な語句だが、致すとは單に

引きまはすといふやうな意味あひにすぎぬ。これに比して、イダシヌクの方が不意討的・抜本的意味の含蓄もあつて、何程か、より積極的・策略的・兵法的ではないか。

手段

立つべきは目的なり。出すべきは手段なり。つくすべきは手段なり、貫くべきは目的なり。

手段を出すの方法は、ダシヌケニ、出シ抜クが兵法なり。ダシヌクとはこちらの思ふ壺に相手をいだしぬくなり。

孫子の兵書には、「人を致して、人に致されざる」を兵法とす。これに對して、日本には「出し抜くべし、出し抜かるな」の語あり。

いはゆるダシに使ふも亦、手段を出すの一法。手段の一手段なり。

手段の同一反覆は手段をつくすの所以にあらず。手段をつくすとはいはゆる手をかへ、品をかへて、つくる所、きはまる所なきをいふなり。

孫子の兵書には、「其の戦ひ勝つこと復フタタびせず、しかして、形に無窮に應ず」とは一度び戦ひ勝つたる手段の同一反覆を戒むるなり。

虚をつくらぬ一工夫

支那の古語に、「過ぎたるは猶ほ及ばざるが如し」といふは、人のよく、知る所なるが、これを訂正して、「及ばざるは過ぎたるにまされり」として、一歩を進めたるは家康の一見識。のちにこれをはつきりさせたのが大久保利通。けだし虚をつくらぬ一工夫。凡そやりすぎて——すぎては、實から虚に逆轉する、そこのおそろしさを戒めるのである。

○過ぎたるは及ばざるよりあやまてり、

過てりとは過ぎたるの事。

○及ばざるを過ぎたるにまされりとして、

さきに家康のちに利通。

しかしこれだけでは、やはりまた別のあやまちをおかすことになる。

これをただしてゐるのが徂徠の兵書「鈴録」だといへやう。「鈴録」に曰く、

過は過たるなり。一切のこと過ぐる時はおちど(越度)をとる。但し、弱敵

と戦ふ時は、深く働き過ぐるをもつて利を得るなり。

近代戦の中央突破や、戦果擴張のための長驅追撃やは、徂徠のいはゆる深く働きすぐるをもつて利を得る場合である。

兵法數字漫談

兵法は一を尙ぶ。兵法は一定(イチジョウ)と思ふべし、不定(フジョウ)と思ふべからずとは、上杉謙信の語。一石二鳥、一舉兩得といふことはあるが、二兎を追ふ者は一兎をも得ず。首鼠兩端は首尾兩斷の不首尾となる。二の足を踏んではいけない。二の舞は愚の極。兵法を柳生但馬守に教へた澤庵和尚の所謂二途にわたりて分別きはまらざる二つの可能性は駄目である。出鱈目兵法である。弓矢の騎馬戦時代は一騎討であつた。一騎駈けの功名を競つて、一騎當千のつはものが、重んぜられたが、鐵砲の徒歩戦時代になつて、團隊戦となつた。元寇の時、元軍は既に鐵砲を持つてゐたのに、時宗の兵はまだ頼朝以來の弓矢の騎馬兵であつた。鐵砲の砲火に、なほ昔ながらの兵法で、高らかに名乗り

出で、名乗り終つて、徐ろに弓矢をつがへやうとした一騎當千の勇者もすくなくなかつた。兵を用ふるの要訣は、我れは專にして一となり、敵は分ちて十となすにある。孫子の語である。これを假りに名づけて專一分十の原則といふ。古へ八様の陣立が考へられた。いはゆる八陣がこれである。一に曰く、魚鱗。二に曰く鶴翼。三に曰く鋒矢。四に曰く偃月(三日月形である)。五に曰く雁行。六に曰く、長蛇。七に曰く衡蛇(二列の蛇である)。八に曰く方圓。――の陣形である。魚鱗は突き崩す陣法、これに對し鶴翼は押包む陣法。鋒矢は突き通す陣法。ナポレオンが得意とした中央突破の戦法は、此の鋒矢の陣法に近い。魚鱗は三角形の左右二邊にて、底邊を缺くが、鋒矢は底邊にも兵を並べた三角形をもつて、突き通す陣形である。

昔は一向二裏―イチムカフニウラ―といつた。一備は敵の正面に向ひ、他の一備は敵の裏面背後に向つて、戦ふ戦法で、所謂正兵奇兵を用ふるもの、すな

はち孫子兵法の正を以て合ひ奇をもつて勝つといふはこれで、かの一の谷の合戦に、土肥實平をして正面に向はせ、義經自らは背後の鴨越から逆落しに攻め入つた如きが一向二裏の戦法である。

ナポレオンは最後の五分間を辛抱したものに勝利は歸するといつたが、日本の古諺には、七分三分の叶合といふ。けだし苦戦に處すべき心得を説いて大いに味ふべき言葉だと思ふ。

昔は長追ひをいませめた。ながおひとは、現代の兵術用語でいへば長驅追撃である。明智光秀の如きも、なほ古への兵法に逃ぐるを追ふも百歩にして止めよとあれば、長追ひは無用なりなどいつてゐる。ことに古への兵法とは司馬法を指す。すなはち武經七書の一たる司馬法にさういつてゐるのであるが、今日では、長驅追撃によつて、能ふ限り、戦果を擴張することが、近代戦の追撃法となつてゐる。「逃ぐるを追ふも百歩にやめば、五十歩百歩の勝ち負けぞ。」

これは筆者の語である。

世界大戦末期の西部戦線における聯合軍の總攻撃は連續的攻撃法であつた。一波萬波の攻撃法であつた。百戰百勝を占めんには、彼れを知り己れを知つて戦はねばならぬ。彼れを知り己れを知るには、五間、すなはち五種の間者を用ひて彼れの情勢をつまびらかにし、五事七計によつて、彼我の情勢並に力關係を比較考量して、周密に、必勝の成算をあらかじめ立てねばならぬ。これでは十分ではない。今日は勿論、昔の孫子が列舉した通り五事七計をもつて制限的列舉の如く解してはならぬ。

これでは十分でない。しかしながら、これを例示的列舉と見て、彼我の全情勢並に力關係比較考量の目安に參酌するならば、今日なほ決して、無意義ではないと思ふ。

岡目八目とは、圍碁戦において、血まなこの對局者に對し、傍觀者は餘裕あ

兵法と目

あらかじめ勝敗の數を見抜く目が作戰計畫の眼目だと孫子はいふ。計畫は拔目なきを要する。攻守の關係、勝敗の關係は單に綱のやうなつながりではない。極限點を超えると、それぞれ互にその反對物にまで轉化する。攻勢は守勢に、守勢は攻勢に。勝利は敗北に、敗北は勝利に。目あての一つに定まらぬ兵法はつひにめど(目處)なし。勝ち目なし。弱はり目に強味あり、落ち目に立ち身の構へある者はほんとうに、攻守虛實轉化の理に目ざめた者といへる。その局にあたりながら、岡目八目のゆとりあることが望ましい。血眼では勝ち目がない。所詮駄目である。

主將と參謀のコンビに二つの型がある。頼朝の參謀景時、家康の參謀正信は共に主將の材ではなかつた。これに反し、信長の參謀秀吉は名將の材であつた。その秀吉の參謀三成は治部少輔で、文官の出身にも拘らず、天晴れ大將の材であつたことを關ヶ原の一戦で立派に證明した。しかしながら流石三成も天下分目に餘り多く缺目カケをつくりすぎはしなかつたか。少し拔目があつたやうに思はれる。

忍術

○忍びを入れて一の谷さぐりてサツト逆落し。

一の谷の合戦に、義経は背後の鴨越方面から進むの方策を立て、逆落しに攻入つたのであるが、此の方策を立てるには、前以つて、忍びの者を呉服屋に化けて正門から一の谷の陣屋に入れ、仔細に平家の動靜をさぐつたのであつた。

忍術者——忍びの者、或は略して單にし、のびともいひ、孫子の兵法では間カン又は間者カンシヤといふのが是れであつて、孫子は間を用ふる五ありとして、五種類の間の用法を論じてゐる。それは一に郷間。二に内間。三に反間。四に死間。五に生間の五種で、郷間とは敵の郷人に因つてこれを用ひ、内間とは敵の官人によつて之を用ひ、反間とは敵の間者によつて之を用ひ、死間とは誑事を國外に

おいて爲し我が方の間者をして知つてこれを敵の間者に傳へしめ、敵敗れて間者共に死するものをいひ、生間とは生きてかへり報ずるもの、即ち、我が方の間者にして、敵の情勢をさぐり、歸り來つて、報告する間者である。一の谷で義経の用ひた忍びは、孫子の分類でいへば生間といふべきものであらう。元就が嚴島に陶晴賢を夜襲するに就いて用ひた方法は、陶方よりつかはされてゐる忍びの者に、忍びの者と知つて、これにわざと陶方を油断せしめるための虚報を洩したものであるから、孫子の所謂反間を巧みに利用して功を收めたる顯著なる一例に屬する。

○出でて瀬田に討つべし、小幡有り、

敵は迫る嗚呼此の城を如何にせむ

大阪冬の陣にあたり、大阪城内の軍議において、眞田幸村の出でて瀬田に迎へ討つ可しといふ雄大な積極的戦略が否決されたのは、小勘兵幡衛景憲の反對

によつてであつたが、此の小幡こそは、すでに東軍徳川に通じて、家康の意を受けたる者であつたから、此の場合の小幡勘兵衛は孫子の所謂内間ナイカンの一例といふべきものであらう。

徳川幕府の忍術者は、甲賀衆・伊賀衆又は甲賀者カウガモノ・伊賀者と呼ばれたものがそれであつた。

これは光秀が信長を殺したあの動亂の際、家康は信長の安土城を辭して、堺にあそんでゐた折とて、手兵も少く、頗る危険の状況にあつたのを、近江甲賀地方及び伊賀の郷士等の擁護によつて、幸ひに無事、領内に歸着するを得た所から、後ちこれを江戸に呼び寄せ、屋敷を興へて、忍びの役に使用したのに淵源するといふ。

今、東京神田の甲賀町及び四谷の伊賀町は、此の甲賀者伊賀者の屋敷跡である。忍術者は兵糧丸とて特殊の携帯用食品を考案し、火の保存携帯を工夫して

ゐた。今日の懐爐なるものは、實に昔忍術者の工夫使用した此の發明に基くものといはれる。

そののみならず、彼等はさらに、今日の毒瓦斯や煙幕様のものに至るまで、つとに發明して、これを實際に使用したといふから驚くではないか。

すなはち忍びの玉といふは一種の毒瓦斯であり、白遁の術・黒遁の術といふは、晝夜によつて、白色煙幕・黒色煙幕を使ひ分けたものらしい。

○白晝敵を煙に巻いて白遁の術。

これは筆者もいささかとりとめのない話になつて、少々讀者を煙に巻いたかも知れぬ。

戦争と足

戦争の歴史を脚光に照らして足の方面から観ると、三つの大きな變化が目に映ずる。

第一は弓矢時代の馬蹄であつて、駿足が尙ばれた。足の早い馬である。馬蹄に蹂躪するといつた。

第二は、鐵砲時代の初期の足輕である。弓矢から鐵砲への過渡期には、侍の武士は馬に乗つて弓を執り、鐵砲は足輕といつて、足輕く徒歩にて合戦に出で立つ雜兵にかつがせた。足輕隊といつて、隊を成し、その足輕大將は侍の中からこれに選任した。侍に對し足輕はいはば足と考へられた。明治維新以後、これが歩兵といふことになつた。徒歩の兵の謂ひであらう。

それと共に、四本足と、二本足の地位が一變して、二本足の方が主兵正兵と

いふことになつた。今日では騎兵の地位は寧ろ從であり、そのはたらきも亦、いはゆる正兵的ではなくして、概して奇兵的であるといへる。

第三は、一九一六年西部戦線に突如として、太古のグリプトドン（いまは絶滅の動物名、現存のアルマジロに似たる動物）の如きものが這ひ出した。其の怪物的な足である。すなはちタンクの無限軌道である。

無限軌道すなはち無軌道的な足である。

タンクは英國の一士官が農場用トラクター（牽引車）から思ひついた發明だといはれるが、其足はつとに、高松梅治なる人が一八九九年に發明したものであるから、今日機械化部隊の足はまさに日本製品である。今次の徐州攻圍戦では岩仲快速戦車隊の如き、此の無軌道的な足が快速繞廻三十里、徐州城西方の鐵橋、（正確にいふならば、礪山東方の隴海線鐵橋）爆破成功のレコードを作つた。繞廻といへば、曾つての奉天戦における第三軍（乃木軍）の左翼繞廻がすぐ思

ひ出される顯著なる戦例だが、其の乃木軍の「ハギ」といふ語は、ロシア語では足のこと、これを譯すると第三軍足軍となるから、おもしろいではないか。當時、若しクロボトキンにして、此のユーモアがわかつてゐたら、前以て、繞廻軍はきつと足軍の第三軍に相違なしと見當がつき、あんなへまの誤算をやつて、馬脚をあらはさずにするだかも知れなかつたのに。

なほ足で、今一つ注意したいのは、支那軍の足である。

督戦隊のために真すぐ後方へ後退できぬ支那軍は横ざまに這つて逃げるといふから、これは、蟹の足又はウンカ(横這ひ)のやうな足を持つてゐるものといつてよからう。

横に這ふものは蟹・ウンカ(浮塵子)・督戦隊に監視されて、真直ぐに後退することのできぬどこやらの國の軍隊。

蠍戦法四例

○缺角で唾み合ひつつさつと尾を

曲げてとどめを刺すサソリなり。

○十二のまなこ睨みつつ、正奇縦横刺すサソリ。

サソリは、六個乃至十二個の單眼を有し、缺を正兵とし、尾端の毒針を奇兵とし、いはゆる正を以て合ひ奇を以て(或は奇を爲して)勝を制するの戦法。まことに昆蟲界の兵家である。

古今の戦史を按ずるに、幕末小栗上野介の戦略、——江戸城最後の軍事會議における小栗の戦略は海陸のコンビを以てする規模雄大な一種のサソリ戦法であつたが、實現されずしてやんだのは、討幕軍にとつての大幸であつた。

○後方は駿河・神戸を船で衝き、關を開いて迎へて討たん。

關とはいふまでもなく箱根の關の事。つまり箱根の關を開き官軍を關東に迎へ入れて、これと正兵的に對峙交戦すると共に、その優勢なる海軍を以て奇兵的に、駿河灣並に神戸を衝かうといふのであつた。

さらに古へに遡れば、カルタゴ對ローマ戦争において、ローマにスキピオ出で、その優勢なる海軍を利用して、ひそかに、カルタゴの植民地にして其の策源地たりしスペインを衝き、更らにカルタゴ本國に迫つて、懸軍萬里、ローマ近くに對峙してゐたハンニバルをして、つひに周章狼狽して歸國の外なきにいたらしめ、これとザマに戦つて、勝利した作戦も一種の應用的サンリ戦法といふことが出来やう。

サンリ戦法の最も近い戦例は昭和十三年五月の徐州包圍戦であつた。南北の

蠟戦法圖解



六、日本と孫子兵法の活用



攻圍軍が、すなはち南北から二匹のサソリが、南は蚌^{カウ}、北は臺兒莊・韓莊の線で、徐州と唾み合ひながら、南北からさつと快速戦車隊の迂廻によつて、南のサソリは碭山の、北のサソリは新安鎮の鐵橋を爆破して、以つて、徐州城の死命を制したなどは、正にサソリ戦法の好個の最近例といへやう。

其後においては、同年十月初旬、信陽の句圍戦が小規模なサソリ戦法の例といへる。すなはち、五里店の東方において對峙しあつた日本軍の蠍は十月六日の夜、突如、其の尾端を曲げて、支那軍の側面を迂廻急襲しつゝ、信陽南方の柳林鎮において、又、十一日には明港において、京漢線を爆破して、死命を制した。

窮通の理

窮すれば通ずとは、自然にも人事にも共に通ずる一大理法なり。名づけて窮通の理といふべし。

いはゆる窮鼠の猫を噛む。——すなはち尋常ならば、猫にかまれるにきまつてゐる鼠であつて、一度び窮して、非常の鼠となるや、却つて猫を噛むは、是れ鼠の窮通なり。

孫子の兵法に窮寇は迫る勿れとは、窮鼠猫を噛むの理を知ればなり。窮鼠猫を噛むは、鼠の窮通なり。窮寇の迫まられざるは兵の窮通なり。

道きはまりて、却つて開くるは、道の窮通なり。右往左往して右にも達せず左にも通ぜざるは、道の窮通を解せざるものなり。

冬來りなば春遠からずとは、四季窮通の理を知らばなり。いざ火事の力といつて、火事など非常の際に、平生思ひも寄らぬ非常の力を發揮し得るは、しばしば人の經驗する所にして、人力窮通の理なり。

いざ火事の場合に出る非常の力を、醫學者は副腎ホルモンの分泌作用に基くと説く。其の説明の當否如何に拘らず、これが人力の窮通なることはかはりなし。

孫子の兵法に、之を死地に陥れて、然るのちに生くといひ、死地には則ち戦へといふは、兵の窮通なり。死地とはけだし、最窮地なり。

古人の所謂達人も窮するあるか、達人も固より窮す。小人窮すればここに濫す。とは、達人は窮して通ずるあるも、小人窮しては、濫して通ずるなきをいふ。小人は窮通の理を解せず、達人は窮通の道を知ればなり。窮してすなはち濫するは小人なり。達人は窮して、しかも窮せず、必ず通ず。

窮して通ずるには、彈力の外、彈力を活用する氣力・企圖心あるを要す。

窮境に屈して、氣力・彈力無き者は、所謂泣き面に蜂、弱はり目に祟り目で、つひに駄目となり終る。

窮通の理を解する者は、これに反して、弱はり目に強味あり、落ち目に立ち身の構へあるなり。

身をもつて當つて碎く所謂體當り戦法によつて、空中戦闘の死地に血路を開く幾多の飛行機が皇軍にはある。窮して通ずる光景中の蓋し最も華々しきもの。

窮通の理數

窮通の理法を數學を以て數字的に闡明せんと試みたるもの、此の一篇なり。名づけて、窮通の理數といふ。或は窮通の數學と稱するも可ならんか。窮屈ならぬ文學的の意味において。さて、――

窮道の窮はキユウ(九)なり、通じて十となる。是れ窮通の理數。

窮通の窮は孫子の所謂窮地なり、翕然キユウの翕なり。求心の求なり糾合なり。九(キユウ)なり。通は通開なり。通徹なり。通ずるなり。とほるなり。とを(十)なり。ジュウ(十)なり。十全なり。

身は三なり、窮して窮身、九となり、通じて通身、十と成る。三々五々、バラバラの力、窮して翕然糾合、九と成る。

三々五々は分散なり。遠心なり。孫子の所謂散地なり。分力なり。遠心力なり、散力なり。三々が九は糾合なり、求心なり、窮地なり、窮力なり、求心力なり、糾合力集中力なり。

窮して通ずるの窮は、三々五々が糾合三々が九と成り、窮して通ぜざるの窮は三々五々が更に一々となり、時に零々の零ともなる。いはゆるベチャンコなり。

古語に九死一生といふ。九死は窮地なり。九死の窮地に一生を得るは窮通なり。

古人の所謂百尺竿頭に立つは、窮極なり。九なり。竿頭更に一步を進むるは窮通なり。通じて十となる。即ち十全なり。

窮鼠は窮して九なり。若しこれに猫が自ら窮をいたし、力を糾合、九となつて、當ることを怠り、遮二無二的に、窮鼠にのぞむならば、云はば是れ、猫は

其の二の力、鼠は其の九の力を以て相對するものにして、窮鼠の猫を噛み得る所以なり。

若し七顛八起——七ころび八おき——なる成語の語法に従ふならば、かの家康一生涯における窮通の如きは、是れを九窮十通、——九たび窮し、十たび通ず——とでもいふべきか。

窮通と屈伸

空氣も壓縮すれば驚くべき力を生ず。空氣銃・空氣傳送管等は、壓縮空氣の力によるもの。壓縮するとは、窮通せしむるなり。約言すれば窮せしむるなり。壓力あれば彈力あり、壓力大なれば彈力も亦大、以つて窮通するを得るなり。猫の鼠を狙ふを見よ。眼を凝らし、體を縮め、氣を専らにして、しかして急に襲ふなり。其の自ら先づ身を凝縮するは、いはば是れ自ら窮して、力を糾合するものともいふを得んか。

人も鼠の如く窮してはじめて、其のおどろく可き力を試すことを得るは、いはゆる窮通の理にして、所謂「憂き事のなほ此の上に積れかし、限りある身の力ためさん」とは、此の理を解し、且つ體驗せんと欲するなり。

孫子兵法の所謂死地とは窮地の極なり。死力は窮力の極なり。極力なり。古への兵法に生を必して戦ふ者は死し、死を必して戦ふ者は、生くとは、兵の窮通なり。

昔は戦國諸將中、家康ほど屢々窮地に立ちたるは少く、而して家康ほど、よく窮通して、その度毎に伸びたるは更に少し。否を殆ど類無し。

昔は石田三成、大阪方の七武將に追はれて、窮鳥の如く、伏見城なる家康の懷に飛び込み、辛うじて難を免れて、自分の佐和山城にかへり得たるが如きは窮通の頗るきはどい劇的なる一例といふべきか。

屈するがために屈するにあらず、伸びんがために屈して伸ぶるは、窮通の法たるを失はず。尺取蟲の屈するは伸びるなり。

窮して折るるは曲がるにしかず、曲がるは通ずるに若かず。窮して通ずるには竹よりも強き彈力を要す。最も大なる彈力を要す。

七、附録 動物の迷彩色

動物の迷彩色

さきの世界大戦中、はじめて迷彩法といふことが案出され、それが陸上では装甲列車・海上では商船小型の軍艦などに盛に施された。迷彩した商船四百艘、小型軍艦四百隻の多きにのぼつたといはれる。

此の迷彩法なるものの發案者がフランスの一畫家であつたことは面白い。しかし著者は今、此の頭のいいフランス畫家の先驅者が實はすでに他にあつたことを知つた。それは自然界において、夙に此の迷彩法を立派に工夫實施してゐる例が澤山にあると著者は思ふからである。

著者は自分で最初これを鳥類について氣づき、それから魚類獸類に及んで、種々なる迷彩色の例を見出し、そして、それらが迷彩色を必要とする理由をも

シノリ鴨ノ迷彩圖

考へてみた。



動物の保護色・警戒色のことは固より、近時は擬態偽装などのことまで説かれてゐるが、動物迷彩色のことはまだ少しも論ぜられてゐないやうである。否な全然氣づかれてゐないやうである。試みに「動物學辭典」も引いてみたが、動物迷彩色といふ言葉すら見出せなかつた。

ボルネオ雉・臺灣雉の迷彩色

頭ト頸ハ蒼黒色デ、クツキリシタ白斑ガアリ、胸ト背ハ灰青色。尾ト翼ハ黒色。腹ハ灰褐色。
此ノ白斑ガ、イカニ、形體ヲ崩スカヲ見ル可キデアル。

高山の雪線に接して住む雷鳥が夏と冬によつて、その羽毛を變へ、夏は黒み多く、冬は純白となるが如

きは、保護色の最も顯著な一例であらう。然るに同じく羽毛の色彩によつて、害敵から身を防衛することを目的としながら、——従つて、その目的からすれば、廣い意味での保護色に相違なからうが、——しかも普通に所謂保護色と其の方法を異にする點において、特色あるものに、近代戦の所謂迷彩色の御手本とも見らるべき特殊な彩色方法を実施してゐるものがあるから面白いと思ふ。近代戦の迷彩法は、装甲列車やタンクなどで何人も御承知のところ。あの装甲列車やタンクに塗られた出鱈目な彩色のやうに、とりどりの色を非藝術的に、ごたごたと彩色して害敵の目に、見つけられにくいやう、形體を崩すことを目的としたものである。

鳥の色彩には、雌雄の性關係から、極めて美しく、藝術的に彩色したものが多く、その目的は或はそれが雌鳥の方にせよ、雄鳥の方にせよ、共に美觀を添へるにあることは疑ひない。

然るに、迷彩色は其の個々の色は、たとひ如何に美しからうとも、その配合は、それによつて、形體の統一を崩すことを目的としてゐる。

普通の保護色は、その環境乃至その他、他物の色彩に、自己の色彩全體を類似せしめることを目的としてゐるに反し、迷彩色の目的は、自己の形體の意識的な分散と崩壊である。そして、迷彩色の最も典型的なものが、雷鳥と同じく鶉類に屬する雉なるも面白いと思ふ。雉といつても、種類が多く、必ずしも皆が皆、さうとはいへぬが、中に就きて、臺灣雉や、ポルネオ雉などは疑もなく迷彩の最も顯著なものやうに思ふ。すなはち、前者は嘴黄色。目の周圍一圓赤色。白色の冠毛。首から腹部は黒みを帯びた青色。背は真中に白色をはさんで赤色。そのうしろよこが深緑色と、黒みを帯びた青色。尾羽は上半分が白色、下半分が黒みを帯びた青色。足が赤黄色。

ポルネオ雉は、嘴灰色。目の周圍一圓青色。黒みを帯びた青色の冠毛。首か

台湾雄、迷彩図解

紫甲列車ノヤウニ迷彩
ヲ施スコトニヨリテ、
目力ヲ形ヲ崩シテ
自ラヲ保護防衛
スル手段トシテ利用セ
ルニキルニ多クアルが、
短距離ニ多クアルが、
リノ中デ最も斜カナ
迷彩ノ台湾雄ナリ



ら腹部は黒みをおびた青色と
黄褐色。背は黒みをおびた青
色と赤褐色。尾羽は上半分が
黄色、下半分が黒みをおびた
青色。足が黄色。――

これらの色が迷彩色の配合
において、すなはち非藝術的
非審美的に並列してゐるので
ある。

雉の叢にかくれるのは頭だ
け突つこんで、長い大きな尾
を出してゐるところから、頭

かくして尻かくさぬを、雉のかくれ方といふ言葉がある程だが、迷彩色によつて形をくらまさうとのたくみはなかなか馬鹿に出来ぬ。これ山野にあつて、體は比較的大きく、しかも空中飛翔はたくみでないところから、此の特殊の防衛手段を以て、それをおぎなふを必要とするからであらう。

雉も鳴かずば打たれもすまいとは、雉が喧々(ケンケン)とよく啼くことを示すと共に若しあんなにケンケンと高鳴きさへしななければ、雉はなかなか見つけにくいことを物語つてゐるものといへやう。すなはち、迷彩色の効果ではないか。

八色鳥の迷彩色

ヤイロ鳥。焦茶、黄色、淡黄褐色、黒、白、鮮紅、濃緑、空青色――八色の

して、巧妙な八色の迷彩色を發達せしめたものと考へられる。

谷川の小蟹などを石の下から掘り出したりするのは、啄木鳥が樹の幹をこつこつこつこつとつついて、昆蟲類を探し出すのと同様、時間を要することにちがひなく、それだけ害敵に對して身を危険にさらすわけだから、それ故にこそ迷彩色によつて、巧妙に自分の姿を害敵の眼から崩して身を防禦しながら、食物をさがす工夫を考へ出したものと思はれる。

まことにけげばけげしい鮮明な羽色にも拘らず、林中にこれを見出すことの困難な所以である。

サカマタの迷彩色

逆又、一名鯨シヤチホコは、他の大形鯨類を襲ひ、その咽喉を衝いてこれを倒すので

逆又ノ迷彩圖—積極的

攻撃的ナ迷彩色ノ一例

逆又ハ鯨トモイヒ、鯨ヲモ攻メ殺スト云フガ、此ノ黑白二色ノ配列ニヨツテ、イカコソノ形態



知られるが、全體に明瞭な黑白まだらが混淆して體形を崩してゐる。

これは消極的・防禦的な迷彩色とやや、趣を異にして、大形鯨類を襲つて打ちかつたための積極的・攻撃的な目的遂行のための迷彩色と考へられる。

アバチヤンの迷彩色

魚類の迷彩色としてあぐべきものには、アユナメ・キハツソク・アバチヤン・寒鯛——これは幼魚の時のみだが——等々がある。

中に就いて、最も特色あるは、アバチヤンの迷彩

アユナメ、キハツソク、アバチヤン、寒鯛、これらは幼魚の時のみだが、等々がある。アユナメ、キハツソク、アバチヤン、寒鯛、これらは幼魚の時のみだが、等々がある。

八、附錄 兵法餘話

弱はり目に強味の頼朝・家康

○ 石橋山の洞穴を這ひ出た敗残の頼朝は、九死一生の身を房總の地に落ちのびたが、もとよりつき従ふもの馳せ參ずる兵とても、まだ數ふるに足らず、弱り切つてゐる所へ、上總介廣常が二萬騎ばかりを引きつれて、見參したのであつた。廣常は大いに頼朝の感謝の辭を受けるものと、心ひそかに期待してゐた。然るに頼朝は却つて散々に廣常の遲參を叱責して、追つて何分の沙汰を待てとのきびしい挨拶。案に相違して廣常は驚いたがしかしまだ大いにたのもしく思はれて感涙の催うし來るを禁じ得なかつた。——天晴れ大將の器、末頼もしき頭梁。きつと日本の大將軍になられる人物ぢやと廣常は思つたのであつた。

廣常の遲參を責めて決めつける

弱り目に強氣の其の意氣よ

○ 三方ヶ原の一戦に敗れた家康は、這ふ這ふの態で甲羅からがら蟹が穴に這入るやうに濱松城にのがれ歸つたのであつた。相手は何しろ負けることを知らぬ堅實な兵法を以て知られ、かねて家康も其兵法にすくなからず感歎してゐた信玄であつたからかなはない。ちやうど猿にいぢめられた蟹のやうなものであつた。

それに信玄は勝ちに乗じて、濱松城まで追つて來たのだからたまらなかつた。然るに城に歸るや、家康は城門を閉ぢてはならぬ。城門一杯に開いておけよと、きびしく命じておいて、食事をいひつけ、悠々と食事をすませた。

追うて來た信玄の兵が城に迫ると、驚いた。城門は意外にも開け放つてゐる

ではないか。これは軽々しく攻め入つてはならぬぞと、信玄が其の堅實性の首を傾けて、思案してゐる間に、家康は一部隊の精兵をして突如、打つて出させたので、信玄勢は早々に引きあげ、かくて家康は危機一髪の死地から脱するを得て、のち栗のやうに、パチンとはじける信長の加勢を得、長篠に甲斐猿の仇討あかへしたのであつた。

逃げて歸つて追うて來た信玄を追うて家康。

弱り目に弱らない頼朝であつた。そしてまた家康であつた。

瀬戸内海戦史の二齣

一 壇の浦

○段々に退いて平家や壇の浦。

○逃ぐるを追うて追ひ詰めて大團圓の壇の浦。

按ずるに、平家の失敗は、此の段々式の退却法に在り。

義經の成功は、逃げて息つくひまもあらせずこれを追及してやまなかつた所にあらう。

九州役における島津勢も段々式の退却法によつてつひに、(國境線で一大反撃に出ることもなしに)城下の盟にまで追ひ詰められてしまつた。

二、和田の岬

此の平家の失敗にかんがみる所あつて、その轍をふまなかつたのが、足利の退却と、その和田の岬上陸であつた。

○逃げて西、多々良が濱の一戦に、盛りかへしてぞひんがしかへる。

○瀬戸内を一氣に西し、東して、海を制して戦ひ勝てり。

信長の天下布武

弓よりのびる鐵砲で

濃美ノホヒにのびし

信長ぞ、

法螺貝ト角笛ノ角ノ圖

法螺貝ハ螺旋貝ノ典型的
ナモノデアル。コレヲ戰場ノ喇
叭トシテ陣貝トイフタ
日本デハ延喜式ニ鼓吹戸ガアツ
テ大角吹小角吹ノ戸數ガ出
テキル。室町幕府ノ義政時代ノ
土民一揆ニ角笛ヲ吹イテキルノ
ガアル。



牡羊ノ頭蓋骨、其ノ螺旋形ノ角
ヲ見ヨ。支那デハ角笛ヲ胡角ト
イフ。胡瓜ナドト共ニ、支那
人ノ所謂西域地方カラノ傳來ヲ
意味スル。

つひに、
天下を打ち延べつ。

信長は天下布武の四字を印章にして、其の文書に
捺し天下に捺し、信玄は孫子軍争篇六如の四句を旗
に大書して、其の陣營に押立てた。

月に貝を吹いて

○月光、主將自ら貝を吹いて攻めかかるなり。
賤ヶ岳の合戦における秀吉を詠じた筆者の句であ
る。

貝とはいふまでもなく陣貝の事。「賤ヶ岳合戦記」

に曰く、

折節其夜は二十日のことなれば、清月東山にのほり日中より明るかりけるに、越前勢の頭の上に、秀吉の御馬印、金のふくべ、さし立ておきければ、上を下へ騒ぎ立つ。秀吉御覽じ、時分は今なるぞ。かかれや兵どもとて、自ら貝を吹き鳴らしたまへば、黒煙を立てて突きかかる。云々。と描寫し得て妙絶。まことに詩情あふるる一幅の好畫圖ではないか。

後年小田原征伐へ出陣の秀吉

○三條の橋架けて繰出す、附髭よ。

秀吉にはどこまでも詩味の横溢するおもむきがある。

昔の戦國時代と金銀

今日では鐵・石炭・石油などの重工業資源の獲得が國際間の重要問題となつてゐるが、昔の我が戦國時代は、金山銀山の獲得が最も重要視された觀がある。日本の戦國時代は、これを或る意味からすれば、實に金銀鑛山の爭奪戦であつたともいつてよからう。

今日また日本は今次大戦争の開始以來、しきりに産金奨勵の戦國日本となつてゐるが、——昔の戦國割據の群雄中いきほひ盛るものは、越後の上杉に佐渡の金山あり、甲斐の武田に甲斐の金山あり、濃美平原の織田は自領に鑛山なきため遠く播磨に手をのべて生野銀山を獲得したのであつた。中國では尼子毛利の確執紛争が實に石見の大森銀山をめぐる爭奪戦であつた。

家康は長篠の合戦に武田氏を亡ぼして、甲斐の金山を手に収めた。秀吉が上杉景勝を會津に移封したのは、其の目的が佐渡の金山を自分のものとするに在つたこといふまでもない。九州征伐の陣中、秀吉は眩惑的な山吹色を山の如く積んで、これを手づかみに取らせては、將士をたたかへせたものだとなつたへられる。思ひ切つた現金的の士氣鼓舞法をやつたものらしい。

○秀吉は角、上杉の金を取つて成り。

かくて成り角となつた秀吉であつたといへやう。

秀吉に代つて、天下の實權を掌握した家康が大久保長安なる山師（鑛山師を當時の言葉では山師といつた）を用ひて、甲斐及び佐渡金山の經營に熱心であつたことは有名で、秀吉も家康も、これらの黄金をもつて、大いに貨幣を鑄造した。足利時代が明から貨幣を求めて、これを使用したのと比較して、まさに文字通り、隔世の感がある。

家康はさらに、進んで、外國から鑛山技師を招聘する計畫もあつたといふが、それは鎖國政策のため頓挫するにいたつたけれど、——當時金掘り技術は直ちに、城の坑道掘りなどにも應用されて、重要な意義を持つものであつたのである。

天草亂で有名な原城の址に、今なほ、當時の坑道を存するが、これは幕軍が日向から徴集した金掘坑夫をして、城内に向つて、此の坑道を掘らせた。所が籠城側もこれを知つて、内部からも坑道を掘つて、生松葉をいふし、汚物を流注したりして幕軍の坑道を失敗に歸せしめた、といふことなど其の一例である。

信玄と家康との對局

三方原合議

○逃げて歸つて追うて來た信玄を追うて家康。

長篠合戰

○甲斐猿の仇討ちかへす三河蟹。

武田流との合流

○負け碁にも勝つ手のありと甲斐の兵法學ぶ家康。

○甲斐を出て駿河徳川に注ぎし兵法武田流。

家康は常に熱心丹念に信玄の兵法を研究した。對峙中は孫子の所謂彼れを知り己れを知るの意味において。長篠合戰によつて武田の敗北以後は、負け碁の

中にも勝つ手があるものだといふので。ここが家康のえらい所で、秀吉が、車懸、坐備へ、何んのたわごとぞやと、謙信信玄の戰術を嘲笑し去つたのと著しい對照をなす。家康のよく大をなした所以であらう。

氏直・幸村の積極的戰策

小田原の陣に、——北條氏直は敵に城下まで攻め寄せられて居負けせんは、後の世までの耻辱なりと、進んで箱根へ出陣、迎へ打つて、雌雄を決するの積極的戰策を立てたが、すでに秀吉方に心を通じた松田憲秀が之れに反對した爲め、議決せず、いはゆる小田原評定をやつてゐる間に、秀吉大學して來り、本營を石垣山におくに及びつひにその機を失してしまつた。

大阪冬の陣に、——眞田幸村はずつと近江の瀬田まで出陣し、ここに徳川軍

を迎へ打つべきの攻勢的防禦策を主張したが、すでに家康方に心を通じた、といふより寧ろ、家康の間者であつたといつた方が適當かも知れぬが、——小幡勘兵衛景憲のために、反對されて自分の主張はやぶれてしまつた。その戦策たるや、關ヶ原役後、父昌幸と共に、九度山に隱棲中、練りに練つておいた雄大な積極的防禦作戦であつたのに。

因みに、——此の小幡は後ち江戸で、甲陽軍學、すなはち武田流軍學の講述に従事したが、松田は小田原落城と共に、秀吉に死を命ぜられた。醜態笑止の末路であつた。

回天艦長甲賀源吾艦上戦死の詳報

艦長乃至艦隊司令長官にして艦上乃至機上に壯烈の戦死をとげたるもの一に

曰く、朝鮮役における朝鮮水軍の統帥李舜臣。二に曰く、トラフルガル海戦における英將ネルソン。三に曰く、幕末宮古港の海戦における幕府側の回天號艦長甲賀源吾。四に曰く、今次の大東亞戦争における我が聯合艦隊司令長官山本五十六大將の機上壯烈無比の戦死。

右のうち、最も知られてゐない甲賀艦長の壯烈な艦上戦死の状況に就いて、ここには元寇の役における河野通有の舊戦を想起せしめる回天號の宮古灣奇襲——官軍甲鐵丸への乗掛を敘して、甲賀源吾戦死の有様に及びたいと思ふ。

明治元年八月、江戸から函館にのがれた幕府の艦隊は、翌二年三月二十日頃官軍の軍艦八艘、いよいよ江戸灣を發し、征伐のため海陸兩道に分つて、北上し來たと聞いたので、されば、その前に、出で迎へてこれを防がんとの積極的戦策を決し、三月二十日曉天に、海軍奉行荒井郁之助、陸軍奉行土方歳三等回天號に乗じ他の二艦と共に都合三艦函館港を出帆して南下した。

かくて回天號は三月二十四日夜にいたり宮古灣口に接近することを得たのであるが、拂曉を待つて、港内艦船の様を見たと、甲鐵丸をはじめ八艘の官軍は港内に羅列し、甲鐵丸のみやや沖合に位置して碇泊してゐる。

そこで先づ巨魁甲鐵丸を槍玉にあげんものと、回天號は舵を轉じて、甲鐵丸の船端に乗掛けこれを乗取らうとしたところ、回天號の舷高くして甲鐵丸の舷と二間餘りの高低あるため容易に飛入ることができなかつた。然るに大塚波二郎なるもの刀を閃めかして一番に躍込んだのをきつかけに續々と飛入り、その狀恰も河野通有の將士が帆柱を倒して、元軍の艦上に切り込んだ奮戦を彷彿せしめるものがあつた。――、そして

船將甲賀源吾は、始めより橋梁に在りて、令を下せしが、軸に備へたる五十六斤の砲を斜めに一發、甲鐵丸の甲板に打込みしむ。此時四五人血烟と共に飛上る。官船よりは、甲賀を目がけて頻りに狙撃するより、左の股を

打たれ、右の腕を打抜かれたれども、足を引き腕を奮つて痛みを忍び、尙ほ令を下せしに、彈丸飛來りて、左の米嚙より右へ打抜きたり。可惜當世無双の海軍士官、一朝宮古の露と消え失せたり。

此役軍監役矢作平三郎を始め、十七人討死す。酒井良助を始め疵を蒙るもの三十餘人に及べり。船(回天號)は春日丸より放てる大砲彈丸二發を受けたるのみにて格別の損所なし。退いて宮古港を出帆、順風に乗じて二十一日午後三時頃函館に歸帆す。

すなはち、かくして、幕府回天の業は、もとより成るべくもなかつたが、此の回天號の勇敢無比の接戦振りと艦長甲賀源吾の艦上における壯烈の戦死とは幕府側とはいへ、天晴れ賞するに足るものがあると思ふ。

大村益次郎の銅像に題す

箒のやうな眉毛を擧げて大村、江戸を一掃^{イッソウ}。

彌助砲

明治十年西南役の戦局は、八代上陸^{ヤッシロ}によつて、西郷軍の背後を衝きたるによつて決する所なるが、また大山少將の彌助砲の偉力も與つて多きに居ることを見おとしてはならぬ。

○百姓隊の彌助砲にて西南武士も崩れけり。
百姓隊何のそのと輕蔑してゐた薩南武士隊も、それであへなくつひに總崩れ

となつてしまつた。彌助とは大山少將のちの大山元帥の幼名で、彌助砲はその發明工夫になる大砲であつた。

參謀と煎豆

なほこんど御序の折、煎豆^{イッマメ}一斗御送り下されたく願上候。

是れは、本日天氣晴朗なれども波高しの名文句を以て有名な日本海々戦の作戦主任參謀が、同戦役中、今其の日時は忘れたが、在松山實家の老母へ宛てた一書信の末尾である。

筆者は彼れの傳記を讀んで、此の手紙の一節に到り思はず卷を伏せて、しばし感慨に耽らざるを得なかつた。

それは泉の湧くが如しと稱せられた彼れの天才的智謀が、ポツリポツリ此の

煎豆をかぢる所から考へ出されたのを思ひあたつて、成程彼れの常人を超えた工夫が、此處にあつたかと、知つて、おどろくと共に、壯年にしてなほ此の非衛生的な煎豆をかぢる無謀な生活がやがて、すなはち、彼れの短命を結果した一因にちがひないと考へたからである。

今日、煎豆といつてもわからぬ讀者もさぞ多からうと察するが、空豆(蠶豆)をいつたもので、とても堅くなるのだが、それを奥歯の臼歯で噛みくたくと、甘味が次第に出てうまいものである。

筆者の少年時、田舎では、これを菓子^シの代りでもあるかの如く、よく煎つてかぢり、また親しい間の御馳走にも煎豆をすすめ、まだ歯が丈夫で煎豆がかめますといふのは、老人達の健康自慢でもあつて、實際歯が丈夫でない^ハと噛めな^ハいし、ひとり歯のためによくないのみならず、胃腸をわるくするのがわかつてゐるのだが、筆者なども、小學から中學の初頃までなほ、よくこれをポツリポ

ツリかぢりながら勉強もしたものである。算術や代數の問題などを解くには、心が落ついて、よく出来るやうに思つたものである。煎豆ならば、道を歩きながらかぢつてもいいことになつてゐた。ドイツ人はよく向日葵^{ヒヤリ}の實の煎つたのを、歩きながら大人が街上で食べてゐるし、^ハ巴里の學生町では燒栗さへ路上で食べながら歩いてゐるといふから、少年時代の煎豆に似てゐるのがおもひ出される。

向日葵の實の煎つたのはどうか知らぬが、煎豆はたしかに歯のためにも胃腸のためにもよくないやうに感ずる所あつて、中學の中頃から筆者は斷然やめ、高等學校に進んで以來歸省の際は、煎豆の代りに、空豆の皮をとつて煮たのをよく母はつくつてくれたりしたものである。なにしろ、田舎では空豆は、稻の裏作に澤山作るので、主要な副食物の一つである。

試験の際など一時的に少々胃腸をこはした方が却つて、頭を一時的ではある

がよくするやうに思つて、中學の初頃までは試験の時などでも、よく平氣で煎豆をかぢつたものであるが、これは一時の權謀的手段で、健康をはかる所以でないかと悟る所あつて、つとに煎豆を廢した筆者。いま秋山參謀が煎豆一斗を老母へ注文の書信を讀んで、煎豆と作戰の構想、煎豆と健康の關係の矛盾背反を思ひ、茲に一片の感慨を敘した次第である。

それは兎まれ、三笠艦上で、煎豆をポツリポツリかぢりながらあの日本海々戰大勝の作戰構想を練つた名參謀。それへ松山から煎豆一斗をおくられる老母の情。おそらく煎豆と共に慈母の情を噛みしめながら。まことに詩情あふれる光景、今もなほ眼前に彷彿として映じ來たるではないか。

著者略歴

京大卒。京大大學院にて農村金融論專攻。上海東亞同文書院教授、上海某部隊參謀部囑託を経て現在日本産業經濟新聞社整理次長。

日本出版會承認
い 230063 號



昭和十八年十月廿日印刷 東洋古兵法の精神
昭和十八年十一月廿日發行 承認部數 五〇〇部

賣價 三圓廿錢

定價 三圓
特別行爲稅 廿錢
相當額

著者 多賀義憲

發行者 東京都芝區新橋一ノ二四 山形初太郎

印刷者 東京都小石川區柳町二九 山元正宣

東京都芝區新橋一ノ二四

發行所 北光書房

電話銀座七三七二番
振替東京四七七五三番
日本出版會員一三〇〇三六番

配給元 日本出版配給株式會社
東京・神田・淡路町

晩年の新井白石

多賀 義憲著
B 六判二三〇頁 二圓八十錢

技術史話雜稿

多賀 義憲著
B 六判二三〇頁 挿繪多數 三圓五十錢

支那と蒙古

米内山 庸夫著
A 五判三五〇頁 六圓五十錢

淨血健民(性の教育)

醫學博士 賀川 哲夫著
B 六判二〇〇頁 二圓

借 類 別 控

969

圖

63

號

年

月

日

書名

東洋古兵法の精神

著者名

氏名

冊

